

あきつぽい人

昨日のおにぎり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あきつぽい男の話。

*小説掲載サイト「小説家になろう」に重複投稿していません。

目次

あきつぼい人

1

あきつぽい人

あきつぽい人

あきつぽい人

はじめると

すぐやめる

別のことをはじめても

すぐやめる

こころ変わりの激しい人

あきつぽい人

はじめると

中途半端でやめる

他のことも

中途半端で終える

なにもかもが中途半端な人

あきっぱい人

たかさんのことを

おわらせる

あきっぱい人

たかさんのことを

中途半端ながらも知っている人

あきっぱい人

たかさんのことを

すぐやめる

あきたら

すぐやめる

自分の自由を理解している人

あきっぱい人

中途半端で

本格的な人には

追いつけない

そして諦める

自分の実力を理解している人

あきつぼい人

道を誤り

黒に染まった

中途半端で

すぐに引き上げられた

悪人にもなれない人

あきつぼい人

自立して

会社に入った

中途半端な知識で

必死にしがみついた

中途半端なことをいかせる人

あきつぼい人

中途半端に出世して

中途半端に家族を持った

中途半端に仕事をして

中途半端に家族と過すごした

中途半端に楽しむ人

あきつぽい人

息子を育て

自立させた

気付けば中年

中途半端に年をとった

あきつぽい人

中途半端に仕事をこなし

中途半端に妻と過すごし

中途半端に友人を持ち

中途半端に部下を育てた

あきつぽい人

きづけば引退

皆に泣かれた

中途半端な男は

中途半端ながらも必死に過すごした

不快ではない中途半端な距離から
自分に接し

中途半端ながらも自分の失敗をカバーし
しかし決して怒らないわけではない

この男が皆は好きだった

あきつぼい人

余生は妻と過ごした

中途半端に楽しんだ

あきつぼい人

愛した妻に先立たれ

自分も後を追うように旅立った

あきつぼい人

なにもかもが中途半端だった男を

たくさんの人が好きだった

中途半端ながらも人に接し

決して不快ではない思いを相手にさせた

そんな男が好きだった

あきつぼい人

なにかもが中途半端だった男は

自分がなにかもが中途半端であることを理解し

その中で必死に過ごした

あきつぼい人

男は中途半端であることを

誰よりも理解していた

男の中途半端とは

ただの普通であった

普通を何よりの幸せと考え

人生を楽しく過ごせる人

あきつぼい人

男は確かにあきつぼかった

それは結局なおらなかつた

それでも男は必死に生きて

捨てないものもたくさんあつた

あきつぼい人

男の理想は高くなかった

理想が高ければ高いほど

自分のような人間は

苦しまなければならぬと知っていた

あきつぽい人

男の葬式はささやかだった

それでもたくさんの人が来た

男は高みを目指さなかった

男は必要以上を欲さなかった

それでも彼は必死に生きた

周りに迷惑を散らさないように

男なりの努力だった

そんな彼を

みんなは記憶の片隅にのこした

あきつぽい人

自分のことを理解して

自分にあつた目標を見つけ

自分の幸せを見つけた

幸せだけは放さなかった

あきつぼい人

男は言った

自分の人生なんだから

好きにすればいい

何を始めたっていい

何を捨てたっていい

でも幸せだけは

放しちやだめだ

とくに俺みたいな人間に

幸せなんて

めったにやっつてこないから

男は一つだけ間違えた

その男の幸せは

男自身が手繰り寄せ

何度も何度も手繰り寄せ

そうしてつかんだ
ものなのだから